
「人の矛盾」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「人の矛盾」

【Nコード】

N5808Y

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

「人間てさ、矛盾してるよね」と彼女は言う。命は尊いと言いなから人間は毎日動物を殺戮していると笑って言う彼女は、生まれつきの生粋のベジタリアン。しかし、そんな彼女もまた壁にぶつかる。

(前書き)

2 行程度、残酷な描写少しあり。

こたつに入り、ドライフルーツをぽいぽい口に運びながらテレビを見る彼女、花野^{かの}。

その横でビール片手に焼き鳥の缶詰を箸でつつく俺。

テレビでは、地上波初登場という邦画がやっている。

よくあるストーリー。

主人公の女の子が重い病で余命一ヶ月。その彼女のベッドの横で彼女の手を握りながら涙を流す彼氏。

合間合間のCMでは、その映画を映画館で見終わっただばかりの観客達のインタビュー映像が流されている。

どの客も一様に目元に涙を光らせ、「感動しました!」「多くの人に見てほしいです。命の尊さについて考えてほしいです!」などカメラに向かってコメントしている。

CMが終わり、最も観客が涙を流すだろうクライマックスシーンに突入した。

今にも目を閉じてしまいそうな主人公の女の子を、彼氏が強く抱きしめ悲しみの声を上げている。

と、横にいた花野が突然、笑い声を上げた。

「えっ。今笑うとこなんてどこにあったよ?」

俺はせっかくの感動シーンをぶち壊した花野の不謹慎な笑い声に眉をひそめた。

「だってさ。人間で、矛盾してるよね」

テレビを見ながらまだ花野は笑っている。

「何が?」

「こついうお涙ちょうだいの映画ではさ、命は尊い尊いつて綺麗」とばっか言ってるくせにさ」

彼女は俺の方を振り向くと笑うのをやめ、

「毎日世界中で、何万の動物を殺処分したり、殺戮して食べて笑っ

てんだからね」

と言い、またテレビの方を向き直り笑い出した。

彼女の言うことに反論できない俺。

ここで、「そんなこと言っつて、おまえだつて毎日肉食つてんじゃない！」と言い返せたらいいが、彼女は生まれた時からの生粋のベジタリアンだった。

彼女と同棲して一年になるが、家でも外でもとにかく食べるものに困る。

なんせ、彼女は俺と同じものを食べれないのだから。

「牛丼食いてえ」と俺が言つと花野は「一人で行つてきてよ」と言う。

夕飯何にしようかとスーパーを見てまわり、俺が手にするもの手にするものは、ことごとく彼女によつて棚に戻される。

「見てよこれ。鶏エキスが入つてるでしょ？」

中華スープの素のパッケージ裏を俺に見せる彼女。

確かに、原材料の欄に鶏エキスと表記されている。彼女と付き合いうまでそんなこと気にもしなかつた俺は、裏なんていちいち見えない。

一番びつくりしたのはあるお菓子だった。

「これならおまえでも食えるんじゃない？」

と、俺がお菓子のグミを取ると、花野はまたもや原材料の欄を指差した。

「……ゼラチン、豚脂肪」

読み上げながら、俺は溜め息をついた。こんなところにも豚がいるとは。

そんなだから、夕飯も俺だけ近くのファミレスですませ、花野は自分で家で野菜料理なんかを作って食べたりしている。

あれこれ俺なりに考えを巡らせ、

「うどん屋は？」

と提案してみると、

「スープのダシは何？」

と聞き返され、俺は更に考えを巡らせる。

「スープのダシは……魚か」

はあ、とまたもや溜め息。

早い話、俺が花野に合わせた食事をすればいいだけのことなんだけど、やっぱり肉が食いたい。我慢できん。俺には無理だ。

そんな同棲生活を一年続けてきた俺だったのだが……。

ある日、一人でテレビを何気なしに見ていると、旅番組がやってきた。俺はそれを真剣に見るでもなく、寝ころがりながらただぼんやりと眺めていた。

アフリカだかどつかの奥地の民族が紹介されている。

そして、一人の男が何やら刃物を手に家から出てきた。

男は、その手にしているものを、押さえつけられた家畜の豚に向かって振りかざした。

その豚の、まるで人間のような断末魔の叫び声を聞いた俺は、そのままトイレにかけこみ吐いた。

思えば、俺は今までああいう場面を実際にテレビでも見たことがなかった気がする。

豚や牛や鶏なんて、スーパーで綺麗に並んでいる解体後しか見たことがない。

俺はそれを見た翌日から、一切、肉が食えなくなっていた。肉を見ると吐き気がする。

が、そのおかげで、花野と同じものを食べることが出来るようになった。一緒に食事が出来るのだ。

その日の夕飯は、花野の手作りの野菜料理だった。野菜だけなんて味気なさ過ぎると思うっていたのに、毎日食べていると、案

外いける。いや、かなり美味しい。

彼女と同じ食卓を囲めることに少し嬉しさを感じながら、俺はつい最近何かの記事で見た話について喋り出していた。別に今言わなくてもいいことだったが、世間話程度にぼつぼつと無意識に喋っていた。

「この前さ」

「うん」

「何かの記事で見たんだけど」

「うん」

「最近の研究とか実験でさ」

「うん」

「植物とか花もさ、話しかけたり音楽聞かせると、それぞれみんな違った反応をすることが分かったんだってよ。何だっけ。超音波みたいな音も出してるのかなんとか……」

野菜を頬張りながら俺がそこまで話すと、目の前の花野の食べる手が止まった。

「どうしたの？」

彼女の顔の前で俺は手をひらひらとさせたが、彼女は固まっている。箸を持ったまま。

「……それってさ」

やっと口だけ動き出した彼女。

「うん」

「それってさ、植物も野菜も、感覚があるってことだよな。痛いかもしれないんだよね」

感情のない声で独り言のように呟く彼女。
しまった。

そういう解釈をされるとは思ってもいなかった。

俺はぐくりと唾を飲む。まずいことを言ってしまった。

「やべっ……」

固まり続ける彼女をよそに、俺は食事に逃げた。

冷や汗を垂らしながら、野菜料理を忙しく口に運ぶ俺。

花野は、明日から、一体何を食べて生きていくつもりだろう。

(後書き)

ちなみに私は、
1年間だけベジタリアンだったことがあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5808y/>

「人の矛盾」

2011年11月17日03時21分発行